

余暇・自由時間における「創り手」の可能性

——高槻ジャズストリートの事例を通じて——

関西学院大学社会学研究科 中川和亮

目的)

市場化された余暇・自由時間では消費が前提になるが、その中でひとびとはいかに主体的に余暇・自由時間に参与できるか。本報告では、検討するにあたって着目したのは、市場原理に即した余暇・自由時間の「創り手」の存在である。そして「創り手」の観点から、いかにひとびとが余暇・自由時間に主体的に参与しうるかを考察する。

方法)

余暇・自由時間を消費ならびに成長の視座から先行研究を検討した。その結果、余暇・自由時間が日常生活につながるにより、ひとびとは余暇・自由時間において主体的に参与するということが示された。そして、いかにひとびとは余暇・自由時間に参与した経験を日常生活につなげることができるか、という問いと同時に、市場化された社会において、「創り手」はひとびとが主体的に参与できる余暇・自由時間の機会を提供する、という仮説を導きだした。本報告では、仮説をもとに日本の地域社会で根付いた音楽イベントを事例として実地ならびに後日聞き取り調査した。聞き取り調査を中心に、「創り手」が提供した余暇・自由時間において、参加するひとびとはいかに主体的に余暇・自由時間に参与しうるかを検証した。

結果)

いかにひとびとは余暇・自由時間に参与した経験を日常生活につなげることができるか、という問いをもとに聞き取り調査をし、検証の結果、参加するひとびとは、「創り手」と「共創」する意識により、余暇・自由時間を主体的に参与しうる、と同時に「創り手」がいかに余暇・自由時間において理念を保持することが、「創り手」と参加するひとびとの「共創」につながることを示された。

結論)

余暇・自由時間を消費と捉えるならば、ひとびとはその場で完結する快楽を継続的にもとめ、消費し続ける。「創り手」が利益を重視するならば、余暇・自由時間を消費対象としてひとびとに提供する。「創り手」が市場原理に即しているならば利益を考慮することは自明である。しかし市場原理に即した「創り手」が利益を考慮しつつも社会的に意義のある余暇・自由時間を創出する可能性について検討したのが本報告である。市場原理に即した「創り手」が市場化された余暇・自由時間において、参加するひとびとが主体的に参与しうる機会を提供することは社会的に意義がある。

そして、仮説をもとに検証した結果、「創り手」の理念に参加するひとびとが共鳴する「共創」が生成されることによりひとびとは余暇・自由時間において主体的に参与しうるのである。

主要参考文献)

- Csikszentmihalyi, M., 1975, *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play* San Francisco: Jossey-Bass Inc, Publishers. (=2000, 今村浩明訳『楽しみの社会学』新思索社.)
———, 1990, *Flow The Psychology of Optimal Experience*, New York: Harper Collins Publishers. (=1996, 今村浩明訳『フロー体験——喜びの現象学』世界思想社.) 他